

今回取り上げる讃美歌502番「いともかしこし」(I Love to Tell the Story)は、イギリスの伝道者キャサリン・ハンキーが作詞し(1869年)、ウィリアム・G・フィッシャーによるメロディーと組み合わせられました(1869年)。
また、この「いともかしこし」(I Love to Tell the Story)は、1938年にノーベル文学賞を受賞したパール・バック著のノンフィクション『母の肖像』(The Exile: Portrait of an American Mother、1936)に出てきます。このことから、彼女のたった一人の子供が「大人になれない子供」(The Child who Never grew)として生まれた苦悩のどん底で、彼女が生きがいを見出し再起するきっかけになった讃美歌であろうと言われています。

作詞

作詞者キャサリン・ハンキー(Katherine Hankey, 1834 - 1911)は、ロンドン南西部クラファムの富裕な銀行家の娘として生まれました。一家はもともと国教会の主要なメンバーでしたが、父をはじめとして、クラファム福音伝道団の活動に積極的に加わり、彼女も自分でバイブル・クラスを開いて活動しました。
その彼女は、南アフリカでの伝道旅行中に深刻な病気にかかりました。回復期の長い日々の中で彼女は、詩の大作『The Old, Old Story』を書きます。それは「The Story Wanted」(1866-1-29 付け)と「The Story Told」(1866-11-18 付け)の2部構成で、後者にこの讃美歌の原詩が入っていました。なお、邦訳者は不明です。

作曲

作曲者ウィリアム・グスタフ・フィッシャー(William Gustavus Fishcher, 1835 - 1912)はドイツ系アメリカ人です。若い頃から和声学、ピアノ、オルガンを学び、30歳でペンシルベニア州フィラデルフィアのジラード・カレッジの音楽教師に迎えられ、10年間そこで教鞭を執りました。1876年、ムーディとサンキーの伝道集会で1000人ものコーラスを指揮したことで有名です。
また、讃美歌(1954年版)には、他に「病の床にも 慰めあり」(397)、「イエスよ、心に宿りて」(521)、「過ぎゆくこの世 朽ちゆくわが身」(538)の3曲が収録されています。

この讃美歌にまつわる逸話

梅染氏が、讃美歌502番の解説[1]の冒頭で、この讃美歌が、アメリカの小説家パール・バックが、たった一人の子供が「大人になれない子供」(The Child who Never grew)として生まれた苦悩のどん底で生きがいを見出し再起するきっかけになった讃美歌であろうと推論しておられます。

パール・バック(1892-1973)はアメリカで生まれた3ヶ月後に宣教師の両親と中国に渡り、そこで育ちました。1927年の南京事件に際しては日本の雲仙に一時非難。その後中国に戻り、本格的な執筆活動を開始。(R1)
1931年に代表作『大地』を発表。この業績によってノーベル文学賞を1938年受賞。
1934年、中国を離れ母国に帰国。~~その後中国に戻り、本格的な執筆活動を開始。(R1)~~
1936年、ノンフィクション小説『母の肖像』(The Exile: Portrait of an American Mother)が著され、この中に今回取り上げる「いともかしこし」の原曲名(I Love to Tell the Story)が出てきます。
1950年、『母よ嘆くなかれ』(The Child Who Never Grew)を著す。これは、〈いつまでも子どものままの〉わが娘と歩んだ母親パール・バックの愛と勇気の手記です。

梅染氏はこの『母よ嘆くなかれ』から引用[2]して、パール・バックが「生きがい」を見出す過程を述べられます。

――[1]より引用――

彼女の少女時代の夢は、自分の家が子供で一杯になることでした。彼女は後にも先にもたった一人の子供しかありませんでしたが、その娘は「大人になれない子供」(THE CHILD WHO NEVER GREW), すなわち先天性の精神障害児でした。これを知った時の心境を彼女は「身体の中で絶望的に血が流れ出すように感じた」と記しています。しかしやがてパール・バックは苦悩と悲嘆の中から立ち上がります。《中略》

一体、その転換はどのようにして起こったのでしょうか。きっかけとなったのは、彼女が、そのような娘にも、好きなことや楽しいことがあるのを発見したことでした。彼女は記しています。「彼女(パール・バックの娘)は晴れた日とか雨の目を、それぞれ楽しむことができますし、スケートをしたり三輪車に乗ることは大好きで、また喜んで人形や玩具のお料理をして遊んだり、砂遊びをすることが出来るのです。また彼女は海岸で砂浜を走ったり、波とたわむれたりすることも好きですし、中でも一番好きなことは音楽を聴くことなのです。《中略》彼女はあらゆる種の音楽が他のものより殊に好きです。教会音楽、殊に讃美歌を聴くと彼女はむせび泣き、それ以上聴くことが出来なくなってしまう。私には彼女がどんな風に感じるのかわかるような気がします。人々が見ぬ神に信仰を捧げる、その神に捧げたあの波打つ人声の合唱は何か無限の悲哀をこめているからです。

――[1]よりの引用、終わり――

これに続けて梅染氏は、パール・バックの母について記すノンフィクション『母の肖像』の中に、「いともかしこし」(I Love to Tell the Story)が出てくる事から、パール・バックのお嬢さんが感動した讃美歌の中に、パール・バック自身が母親から聞いたこの讃美歌があったのでは、と推論しておられます。

では、「いともかしこし」(I Love to Tell the Story)が出てくる『母の肖像』の箇所をご紹介します。

――[3]から引用、短く編集――

夏になると一家は杭州伝道に差し支えない程の距離にあった山上の寺院の部屋を借りて住みました。そこでは夜も昼も規則正しく寺院の鐘は鳴りひびきます。それは人間の世界の悲しみの満ちた、奇怪な、神秘的な音楽に聞こえたようです。《中略》明けがたと日の入り時刻に、僧侶たちは読経をします。エドウィンはこわがって、母のもとへ逃げて行って胸に顔をうずめます。そんな時、母は、つとめて自然の声で明るく話します。「あれはあの人たちの讃美歌なのよ。かあさんたちがどんなふうにいるうか、坊やは知ってるでしょうか、ね？」そして、自分のほおをエドウィンのほおにすりつけながら「いともかしこし、エスのめぐみ」と低くうたい出します。それからおもしろい子守歌に移るのです。たちまちのうちに、寺の部屋は彼女のにぎやかな、よくひびく声でいっぱいになり、子供はやすらいでくるのでした。

――[3]よりの引用、終わり――

引用出典

[1] 梅染信夫『栄光、神にあれ 讃美歌物語』、新教出版社、1995年、P135-138

[2] パール・バック、松岡久子訳『母よ嘆くなかれ』、法政大学出版局、1950年、P.52

[3] パール・バック、村岡花子訳『母の肖像』、ポプラ社、1979年4月30日 P.110-111 から抜粋